過去の災害に学ぶ

大東中学校三年　河合（かわい）　萌恵（もえこ）子

福井豪雨が起きたのは今から十一年前。私は四歳だった。家の後ろを流れる小川はみるみるうちに増水。今だかつて見たこともないところまで水が上がり、ついにあふれ始めた。

両親は、予想外の水位上昇の速さに恐怖を感じながらも、万が一に備えて対策をしたそうだ。低い位置に置いてある家電をできるだけ高い位置へと移動させたり貴重品をまとめたりして、それは大変だったらしい。

私は初め、「これからどんな事が起こるのだろう」と、見たことのない光景に心を弾ませながら窓の外を眺めていた。しかし、今にもあふれ出しそうなほどにまで上がってきた水や、慌ただしそうに動き回る両親を見ているうちに幼い自分にも事の重大さを感じることができた。幸い我が家は被害こそなかったが、あの時の光景は今でも私の脳裏に焼きついている。

平成十六年七月十八日に発生した福井豪雨では、一時間に八十ミリを越えるような猛烈な雨が降り、約二百棟の住宅が全、半壊、一万三千棟を越える住宅が浸水の被害にあった。また、地盤がゆるみ、土石流や地すべりなどの土砂災害も発生した。この豪雨は、死者四名、行方不明者一名、負傷者十九名という大きな被害をもたらした。

私の自宅周辺では浸水などの被害はなかったが、被害の大きかった地域に住んでいた学校の先生は、当時の様子を、

「家の前の道路はにごった水であふれ返り、氾濫した川には、大木、冷蔵庫、小屋までもが濁流と共に流れてきた。避難するにも動けず、おびえることしかできなかった。」

と語った。

また、私の住んでいる町と同じ校区内でも、山際の地区では浸水や土砂災害による被害も大きかったそうだ。お話をうかがった住民の方によると、細い川の水があふれ、ものすご

いスピードで水が流れてきたそうだ。川と道路の境目すらわからず、道路の水は腰の高さくらいまで来ていたという。水が引いてからも、家の中も畑の作物も全てが泥まみれで、片付けも相当に大変だったようだ。豪雨の後防災のために砂防ダムが建設され、ため池もつくられた。

災害はいつ、どこで起こるかわからない。それは数十年後かもしれない。もしかしたら明日起こるかもしれない。その日のために、日ごろからできることをしておくべきだと思う。自分の命を守るために、今日からでも始められることはたくさんある。次に挙げる四点は、中でも特に重要だと思われることである。

一点目は、避難経路や避難場所を決め、家族ともしもの時の事を話し合っておくことである。自分の住む町の危険な場所や避難所を確認するために、ハザードマップを見ておくのもよい方法だろう。

二点目は、避難用品を用意しておくことだ。避難から三日間は生活できるように、飲料水や非常食、懐中電灯、ラジオなどを一つの袋にまとめて用意しておくとよい。

三点目は、災害に関する情報を知っておくことである。メディアの気象情報などを集めておくことで避難するときに迅速な判断ができるだろう。まだ、土砂災害には地鳴りや地面のひびわれ、水のにごり、小石の落下などの様々な前ぶれがある。近くに山や急な斜面がある場合には、それにも注意しておくとよいだろう。

四点目は、避難訓練だ。私は、この避難訓練が、災害時の自分の運命を左右すると思う。実際に東日本大震災が起きた時、日頃から定期的に避難訓練を行っていた小、中学校では、津波が押し寄せる中、迅速な判断でいちはやく避難し、児童・生徒全員が無事に津波から生き残った。奇跡とも呼ばれるこの避難は、実際の災害を想定した実践的な訓練があって

できたことなのである。

この四点を日々の生活の中で行うことが、災害時に自分の命を守れるかどうかを左右する重要なポイントである。

しかし、実態はどうだろうか。福井豪雨のあとで我が家の下足箱の上に置かれた、防災グッズの入った避難リュックは、数年後には点検されなくなり、いつの間にか姿を消してしまった。避難訓練は、学校や地区など様々なところで行われているが、一体どれくらいの人が万一を想定して訓練に臨めているだろうか。

人間は忘れる生き物である。過去の悲惨な災害も、時の経過と共に風化してしまう。その記憶を忘れないことこそが、私たちの防災意識をさらに高めることにおいて最も有益であると私は考える。土砂災害が全国各地で頻発する今日、今一度過去のような災害がいつ起きてもおかしくないという意識を持ち、日頃から災害への備えをしておくべきである。